# では一方

## 宰主★郎路生麻



力號

pensoj flugas trans la land-limon

Senryu Zasshi

No.265





空想と野心が俺を殺さない

葬式もダンスも同じ靴をはき

闘病にラジオも持つて行くといふ 鐘楼に鐘のないよな暮らしして 老ひらくの恋とや二三軒賣りし 役得へ大きく笑う声がする 必要以上に米をほしがる世帶持

缸

夕暗迫ればパン~~と間違われ 税務署はラブレター迄調べあげ 恐ろしや税務署に有る計算器 終電の娘を母親は胸に抱き

折詰をさつと彩る紅生姜 伊丹市

少年の夢は窓辺にあごをのせ

カストリに安南の夢瓜哇の夢

老大佐兵を語らず咳してる

診察の途切れへ薔薇がかさと落ち ペニシリンまあよかつたと長屋出る

**燒ビルに化粧のあれが娘の会社** 横浜市

楼

病院で子を負つた父人生苦 ギロチンにわれも上らん馘首迫る 嫁入のタンスの話父默す

> **鍵鼻が門衞と云ふ額に出來** 掛合つて來いと娘をどなりつけ 旅役者今日は向うの町で咲く 欺れるそれも遊びのコッとかや 酔う程に呑んで見たいと養子云ひ 音丈けのキツスに電話サョーナラ 三角の恋ピストルでけりがつき 運轉手バツクミラーにあてられる 薄情な男の靴の光り様 プラカード靴が減つたる丈けの事 ボマードの頭を逃げた膝まくら

妻と來て薄い雜誌を買ひそびれ 尼崎市 水 **咳拂ひ聞こえて電話代るらし** 

大男解はねば云へぬとはさびし 寒鮒のもの云う如し二三尾 村長の自轉車牛を追ひ越さず 娘のつどひ密柑ころ~~林檎ころ~~ トラックで來た候補者のよく太り モーニング盛んな頃のおもひでか 上京の大阪駅に雲が湧き 人から離れ牛は小川に影映す

今日も詐欺又も百万二百万 踊る神パーマをかけてゐるのなり お賽銭などは大佛氣にかけず 奈良縣

> カストリですさんだ過去へ酔ひつぶれ 好

郎

労組のビラがどぎつい赤インキ

年ぶりで出勤

ガラスピンにひびがはいつたからだです

藤草一

郎

うらやましキリン食ひ過ぎ死んだとさ さりながら一寸礼した二重極 ハイキング彼女弟を連れて來た

税務署へ今日は女房を泣きにやり 税金のやつさもつさへ子が産れ 納税へ重役室の灯がついき

岡山瀬

田

久

米

雄

通信簿母にすまない顔で出し 七分咲ですよと春を車窓にい レントゲン安心料をさつと出し

榮轉の握手花吹雪の眞下 人波をそれた二人の肩も春

大车川市

髙

田

逸

悋氣する妻へ徹夜の稼高 令嬢の恋は散步でみたされる 内職がばれて経濟やつて來る ーヂャンの朝蹇起すも塵叩き

四十八そろ~一市議になる野心

すがられておいしよと出せる金持たず 神様でないからと云う言ひのがれ 一万円のぐじと鼠を替へて來た 大阪市 市場 沒 食 子

うたがえば一と粒くれた五色豆 時々は妻へ五十の身があまへ 色氣なき四十姿のハイヒール 靴みがきでもしますよど馘首のこと 標札も春だカンナをかけてやろ 本願寺でんご控えて京の春 名古屋市

風

靴磨きに靴のつかれをおしえられ 140

事務服の下から派手なお座敷着 須

二日醉で顔が歪んでゐる訓示 税務署のこんなどころに咲く櫻

千円もするネクタイに腹が立ち 所も言はずいつべん遊びに來い さくら見て帰るご押えられていた 踊つてる昨夜質うけした服で

大阪市 īE

水

客

お別れの樒の水がしたゝつて 通夜の人いちどに帰り百燭光明し てだてなき病と知らず牛乳をのむ

完成をちかい名人押默り 朝寢した顔で雨傘返しに來 輪タク屋今日は私用で乘つてゆき

動くものみんな動いたホームラン 丼で一杯やつてからのこと 弁慶の外は番卒眼もくれず

神戸市 內

花

信じてたひとみなすべて夢のなか 麦ぬけて菜種を縫うてバス走る 捨てられた大根春の花をつけ

君愛すその一行に身を捨てゝ 奈良縣 尾

崎

方

Œ

氣儘も言うさ婚期遅れた娘なり

持つ物は持つては見たが死が近い 跳ね過ぎて魚は陸地へ脱落し **垢染みたハンドバツクを持つ生活** 孫の小使ひかせぎですと言ふかつぎや

世話ずきのうちの用事はしたがらず **隣漢が泥にすべつて心地よし** 春はよし一と冬中のぼろをぬご

姬路市

笑

青春だ泣かせて置いてやり給へ 税金が拂えぬ暮しいやになり

豆

秋

紙幣よむ手つき行員ほどになり

見合の日障子に穴があいてゐる ふと見れば故人の雑筆並んでゐ

日傘一つ村を明るくして通り 愛人の眞面目が少し物足らず

関体で出た日無口な人でなし

春の湖ひかり何事もなし 春の淡陽遠山がうれしいよ

ドツヂ談首相は語るかゝる春

大阪市

門番と違う守衞だ監視だよ

不甲斐なき父の貧しさ子に詫びる 札束で愛は買へぬと思へども 人間苦リズムにのせてまぎらせど

前借をしても派手好きやめられず

兵庫縣 沢 史

薬

襟垢のそれでもルージュだけは 馘切りへゆがんだ笑ひ六十二 つけ

善男善女スリも彼岸へ影をなげ

銀行の出納籠の鳥に似て アスハルトもタイルも淋し鋲の靴 兵庫縣 小 西

無

鬼

生活へ女房を叱る癖がつき うつかりと坐れば担ぎ屋の前だつた 去んでこます勇氣が欲しい養子でゐ

思い切つて言へば添えたに暮せたに 出稼ぎが夜霧の中の切れ話 おい燕が來たよ上衣脱いだろか 神戶市

本美 奈

子.

尼 助

出雲市

谷 莊

百万円当れば辞職する話

驚へ口笛吹いてみたくなり 公約へ又だまされた票となり

洋装へ妻は娘の智惠も借り そよ風へ少女の線の美くしく 十円も出して錢湯で風邪をひき

奈良縣 白 4

奇

朗

馬の眼もトロリーと春の街 ネクタイは官給でないポリスさん 性病科自業自得の笑ひ声 一べつをくれて横むく靴みがき

醉えば出る歌に昔はなつかしや 故陸軍の石塔囲む麦畑 葉櫻になつて仲居は質に入れ 岡山縣 分

北

路

教はつた橋迄の道近くなし 石段の霜に今年の第一步

鹤

喜

由

東京都 Щ 根 白

軽井沢そんな世界もあるのなり

星

老朽と言はれどもない読書ぶり 下積みの窓に大笑してみたり

美人だと思い結核かと思い 生きるべくだまして儲け悔いに悔

連

吹田市

松

春

月

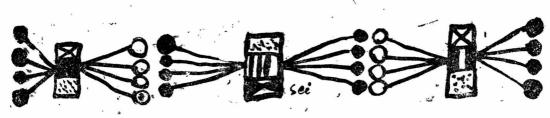
俺は俺お前はお前で儲けてや 洋裁が出來て俺の荷軽くなり 色あせた「つゝじ」私をなぐさめる

春の風処女の香りの様に過ぎ 喰ふための强盗だとわ恐しい ネクタイを買ふ娘見送る独り者 大阪市 田

吸取紙飢えた子供の様に吸ひ 布施市 糸 本

月

女房もズボンをはけば線ほそく



描眉毛人生観がものすごし 天皇旗今に現はれそうな代々木 鏡花氏も見たらう湯島の梅に佇つ ダンサーにしてはいやはや太い足 嘲笑をされに世に出た五錢紙幣

瀬戸市 鉛 木 3 ž を,

夜行車にどけるが如く座りこみ ぬぎすてた足袋をさがしに子につゞき かたづけた跡うら淋し葬儀の夜 まちされず寝たまくらべに土産つむ 生活苦だがこの家の有るつよみ 五錢札財布の底に死んでいる 渡 辺 孫

鳩の湖水なが (と南禪寺 あさつて來いといわぬばかりに花七分 滋賀縣 藤 田 b 7:

看板は上げてまへんがやつてます かこはれて居るのに大も猫も飼ひ それからの鞄かゝへて隅へ乗り **佘良縣** 进 竹

雪淡く改札口に妻が待つ 終談へ襖を開けた茶の姿勢 重役の紹介とやらにそりか

山口線

祝盃は二人がかりの酒を酌ぎ 鉢卷も締めたが年はあらそへず 生字引などゝ言はれて馘首近し 食ふだけがやつとに朝は鷄と起き 無心狀これ程の手をもちながら

お行儀を教へる母で嬉しそう 鬼 市 叱られて居る電話なり足を擦り

甦

光

錢箱を腰掛にして靴磨

腹のへる野球へ寄附とは何事か 同権へ鯖一匹が真二つ 吸数を拾う暮しに雨でなる 今日も又鉄道省への奉公か 花の留守誰か友達來んかいな 京都府 M Ľ,

青

升

立ち飲みに砂吹きつける風があり 同居人何やら買うで一人食べ

人阪市

江.

H

浮浪見がリンゴの紅さへ立止まり 恋人と駅前の灯を避けて行き 山の宿ですりへ無聊の足を乗せ 七輪の火が消えた頃やつてくる 氣ずまりな部屋を出て來て吸ふ

名古屋 Ш 林 il:

思

捌

商学士あわれそろばん習らうなり 守衞さん聯隊長のなれの果て 人のためと言へば立派な堕胎術 大阪市 H

る

春じやもの女心に派手な色 たまさかの醉ひの果てなりサノサ節 百貸店など見て帰へろうか雨が降り 布施市 称 F

青

真ん中の鼻から白粉塗りつける 満員でどうせ踏まれる靴磨く きたりに馴染まんとする妻の 消

H

良

-J.

無遠慮な娘婚期を過ぎた頽

芋づるの様に生れた子にまいり 姓かへただけで女はもどのまり 膳の上もろた卵がのつてゐる

終遠くなつ<br />
て同権口にせず

图

地

鬼の子出せば子供は抱きだがり 更の子藍の上を歩かせる 尼崎市

> 子-でしやばりは隣の留守の鍵もあけ 爪判で事足る母の手が震るへ 妻だけは握手はせずに限で別れ 誘惑へその手は古い宝塚

悼合田笑字切氏 金沢市

安

111

留

Ž.

連の露老眼鏡の底へ來た 級の一合なめた水無月が別れ 悼鴨居悠々氏(北每新聞前主筆

叩かれてあわれ佛像値がきまり 炊事場の窓から見える窓坊主 地下足袋は新らしかつた何処へ逃げ ツギのある足袋をはいても博士号 松山市 田 (hi

清元え明治時代の耳になり **老妻がある倖せのシャツの** 侮れず親子菓子代たばこ代 出る愚痴え借間の頃を忘れたか 継ぎ

变

AL.

信長に仕へし系図洗つてる 實喰ひは清和源氏の鐙着て

经效外

-J.

竹

スタンプのインキが仕事始めなり 大阪市

妥協もせず腹が減つたとも言わず 肩組んで行く学童に雲雀鳴く

橋 綠 1:1:1

退職に思ひ出の多いことばかり やめるのかと云はれ寂しい淚が出

停年退職満三十八年

切れば負ける世の中になつ りの昨今、たとえ十円でも値しい風景である。と角金づま

時は無意味に近い二音字を占

では

生が常套語の研究でのべられ

にように、断定を强め、ある

本誌二、三月号

でいいのだが、くり返し

## 男飲めばなに女海は離 縁する 百 星)

山雨樓 のある思索的句であると見た れてゐることによつて、 う云う人間探求の限が向けら 情で制し切れない偶発性をも 意識が宿つてゐることは否定 あるが、男性にこうした潜在 つている。自分はこの句にそ ざしたものだけに、 し切れない。動物的本能に根 れの言葉で 道徳や人 深味

べきことだと思ふ。

女房も聲をあわせて値

(解王)

を加えることにした。お互いににふれた句を拾い出して、短評 たい。(注)最初の発言者が句 ない点のあることは諒とせられ て取纒めたもので、委曲を盡さ 遠く離れてゐるので通信によっ び「近作柳樹」の中から琴線

の提出者を示す。

綠之助| ろうか。

全般的に山

雨楼氏

るが、

で、

ヷいエ゜ 久米雄― 上五が私には面白く 如何にも巧みである。 エールをかぶつているが、 敍法は何氣なく冗談ロの 全体を通じて着想は概 しい風景である。と角金づま何かを値切づているほほえまはそばに夫がいる。夫婦して

久米雄= 女房もこあるからに

評句

出 松 生 本 山

III

田福尼石浜

中田

山綠 雨 樓助郎雄

新しい川柳の在り方として大ないか。句が巧みに失し、句の表が強く浮び過ぎてはいなの句が強く浮び過ぎてはいいのの句が強く浮び過ぎてはいい。何が巧みに失し、句の表 ろはカンの確実さには感心す お説に盡きている。促えどこ 推敲の余地があるのではなか て読んでいる中に上五はまだ 山雨楼氏の「人間探究の 無雑作に出來上つた句 0 この場合は訂正の余地なし。 意味ではないが、川柳の陷り ている。徒に上品ぶるという 語はなるべく避けたいと思つ とであろう。表現にスキがな 髓分率ラッなやつを落するこ 緑之助= あわせる女房の方は が、女房とか亭主とかいう句 い。難の打ちどころもない 着を感じる。

に題材が見つからない。十四氣持は大いにあるが思うよう

たのだが回覽句評が來て徹同 ようと思ってチェックしてい 久米雄= 私もこの句を提出

した。武玉川ばりの句を作る

きな課題としてお互に考究す 世ず、ピンと來ないように思山雨樓= 句の焦点がはつきり

いのでこゝでは控える。但しは簡單に論すべきものではな易い俗臭を感する。この問題

い位だ。

武玉川につけ加えてもらいた 字詩としてきびしいこの句は

のの想像にまかせている。久句の陰にかくれており読むもう。時間も場所も商品も全然 たらしいが、内容的に大した 米雄氏は中七に面白味を覺え 也どめの表現ばかつて路郎先 味も深味も持つていない。

である。 題に相和すのは余りにも当然 徳ではないが、共通の利害問 法のもと夫唱婦隨必ずしも婦 はあまり效いていない。新憲めることもある。この場合也

舌二枚でもたらぬ世の

きた。中七に川柳さしての愛 う利いている。 者の老錬に敬服する。十四字 ようだが、遅沌、複雑、 詩であることがこの場合一そ の世相にズバミ刺し込んだ作 読すると新鮮味に欠けてゐる 緑之助!! 武玉川ばりの句で熟

世相に対してわれわれは心の う。なるほど現代の混濁した 二枚とは多弁を指すのであろ をつくことを意味するが、舌 て、 格調に資辞を送るに急であつ山雨樓= 前二評者はこの句の いと思う。二枚舌と云えば驢 下つてこの句を吟味して見たであつた。自分は靜かに一步 内容的檢討を加えるに寛

と見ることは云い過ぎであろ 山脈がこの句に潜在してゐる であろう。そこ迄思想的な火 たいことが云えぬ憾みはある 占領下にあるので本当に云い 放されたことはない、しかしか。言論の自由は今日ほど開

嫌な雨だが降れば休め

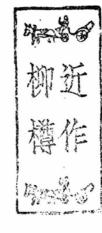
何だと思う。

う。自分はむしろ舌足らずの

怪奇

のどけあいの所産である。私らわれ であり、感情と理情る。必きよう川柳は人間のあ に表現されてその無技巧が旬んで來る。作者の感情が素朴い。情景と人物がくつきり序 意を生かしている とも 言え には却てこの調子も悪くな かわらず大自然下の百姓風景る。然し前書があるなしにか な嫌いをいささか持つてい 殊に中の「降れば」が説明的 それだけにテンボがのろい。 緑之助= 十七音律でない何、 るとも思う 風

露する表現としてこの句は ものであるが、この心事を吐 不平不満を山ほど持つている れる。この句は主観的な表現久米雄= 作者は農業かと思わ つけてまで百姓の句と説明 かるのだが表現の上に前書を いような氣がする。氣持は 全そしやくの域に達していな れると思う。そしてこれは完 くても結構十七字にまどめら すれば必ずしも字余りにしな いるが、客観的描写をもつて からこうした字余りになって はこんな素直さが好きだ。



感 悪党と見 復讐のやうに神話をえ 情 ž 殺 へ ね L お世辞で ii П 紙 ¢ 儲 it 3 ^ 出 対 × す 大牟田 īī 人

戰 米のない 争を 美 小声に母は來た しく ijk t 訪 人 を 3 怖: L ひ 同 [ii]

手にもつと面白 手土産の効日

いほど

波 П

3 r

3 仰

愈 3

[ii] 同

老いらくの恋と喰だけ

飲かぬ身

同

3 0) は無事な

診察室ドアを明くればもう泣く子 女医若く流 0 海 0 心 飲 大きく めば死 行歌 など ぬ量聞きたがり 待 て П Ł す・ 云 3 ٤ 3 和 歌 山宏 同同同 司 同 ガ

三味線で食 ム商賣 ŧ 樂 で な

十八で孕んで後家にな つ

たと

は

有 つばくらは來るい故郷に別れ行 最期かも知 しき山 るものゝ爲めの花なら 0) 0 時 河なれどもみ 0 れぬ故郷の 櫻 ح か 3 ガンザ \$ 花 h 5 12 13 降 ね 的 杏 3 ٤ < n to 2k; 尼 崎市職 [11] 司 松

時計より確かな妻が日 变 決裂へ煙管きちんとし 收 明 で ij 天 酒 苍 ば 氣 · E 0 花 長者の 予 τ 報 見 る る 傘 誰 を覚ま £ 妾 l \* B מל な で 提 知 n 3 げ す N Щ 縣 同同同同 t 同 iài

Ш

3

またかとは

云はぬが少しくといっ

ŀ

八代市

Bry

その上にのろ氣も質れ

る

老

人

一世帝そのまん中 一会弟もなどと どこもおわしまさずに負けました ŧ 言薬に寢 分 (i) はひ Ŧ. 放 机 ٤ 仲 付 b יל 13 ė 1 ti h す. 廣島 芳 百 司. 司

許された旗日は風が吹く ヂ 蟷螂の斧に 倦怠期などとゼイタクらしく云ふ 生きん爲破れかぶれの後家となり 一と苦労して見たい人振 リ貧へ女房無口にな 双 向ふプ ラ 0 り向 T ば カ 來 か Ì カン 3 h F 横 De īþī 万 ri 同 司 泉 年

動物図 社会科は物 大地まで安 一万円くど 軽 V 定 财 ni d 5 様だ りは ŧ 有 欠 かき p: 子 くら カュ か b 彼 連 菱 0) し 沈 n 成 頃 下 0 今治 市文 庫

親 出た頃は天まで仲びる へど別 の氣を 1: 访 子 は × 3 子. せ 0 3 る 嵇 道 流 Ġ b を 0 の 往 行 芽 < 歌 草 同 u

店退けて母と言ふ身の 遺家族としての恥じなき職を択 卖 Ti 求 度石母とはかくもあ む記事未亡人 胸 乳が張 3 だ 3 3 力。 大阪市 iii 同 n

税金も飲ませば軽くなる 子をあや 職をそし 15 職 す時はダン 5 到 87 ψH 削 で サーでない気 0 世 Œ な ъ́г. 持 5 b L 石川 月 间 露

て未帰 100 0 友思 1 大阪 市 11 [11] 天

ある。

ない夢を抱かせ、

うであるが、

税金へ此れ見なはれの整 その頃のシンパのまゝで老いている 手をやいた子だが生きてゝ欲しちゃ 理 する

> か。道はまだあるのではなかろう なくても、この着想を生か この作者は三句

然を詠つている。夕燒と星

思う。この句境はしかし僕も み方が足りぬ点にあるのだと 主観そのものの深さに突つ込 を指摘されたのであるが、こ 対し久米雄氏は表現上の不満 た評言はよくわかる。これに 絲之助氏が作者の素朴を愛 るのも自然の発露であろう。 ば天然現象に呼びかけたくな つたことにあるのではなく、 と雨だ。農業に親しんでおれ 句の欠陷は主観的表現をと がもてる。爪の垢ほども î

レンがないからである。

う。同時に今日の苦しい生活 受してゐることを恥かしく思 あるが、 ものを意識的、 て深思するどき、 **静かに胸に手をおい** 僕自身公僕の一人で 無意識的に 役得と云う

は実に困難である。 として有難く思う。 題は根を張つてゐるので改善 誘惑の手をさしのばすもので 得と云うものは公務員には もたらしてくれることを俗人 に何程かの物質的うるおいを 公僕の夢役得が去來す 中國では大つびらだそ 僕も公僕で六月から 日本ではこの問 はしたない 山雨樓= このエキススラは動 られるのを如何ともし難い。 のである。 でもこの感じはわかる。 だ私には相当の心残りが感じ きりしてゐるというだけでま れる。が、慾を云々ばすつ

200 その内容と気持と 5 1 無難な句だ。 レー シ になる は 変ら

ている。 を引きしめてゐて余韻をもつ 僕の夢に同情する。 緑之助□ 切なくもは o 佳句として推称した 下五が句はかない公

立 エキストラ思 ち止り わず秋 (史 z

傷を詠い上げることが川柳でればならない。ただ單なる感 思わず秋を覺えるように立ち ある
と思う前に、 柳のひとつの行きかたでなけ いたい。 止つた素直な感情 を一應捉えている。そして 即一 エキストラどいう身 この句を味 それも川 い型の

ら、こうしたものの発表も望川柳の全領域でもないのだかれる。可笑味や皮肉味のみが 何で無持のいい写生吟ともと が潜んでいる。すつきりした る印象は多分に感覺的なもの ある。だが、この何から受け 柳にはあまり見えない着想で 辰二二 今までの古

要求する所以であり さが川柳の媒体とはならない く。スターでもニューフェス よき川柳が非凡を

差し 働らけば食える理想の 金 朝のバスの中も給與の 花の下お粥をすすつた 銀狐 夫あることにグン 闘病の散歩は樹を押 後添ひを貰らひます 叱られる方 浮浪兒の 薬なぞ飲ん で 行幸え間に 立 住宅難養子 赤ン坊の手が窓づかみ 春欄満米積んだ牛に出 朝櫻そつと 懊悩の果てに布圏をは 医者の眼のうごきを思者見逃さず アカハタを愛して女ら 白粉を落せ こりん~と言うてゐたのに又嫁ぎ 戰 票を入れた候補は署に 志 は 0 飲めど怒鳴り散らせどなぐきま T 床 へてん 無 傳 二号の 入れの B 恋に指 故 女 3 男 無 鄉 闘 合 1: 盗心をと 泣 0 は P 4 ば 化け方 夫 導 疲 己を す 0 有 ゆこう 女 d's 炬 iz 士 三実 ح ie は 駅 氣 から n スを思 燵 + は t) 111 を M だ 0 L た 11.2 t 力。 0) P 素 质 悠 暗.か 3 納 兒 は 潋 T かに ŧ 须 b ね 駅 11 事 < 石 外 < 蓟 殿 私 30 < 係 守 Z ひ 8 に Ø じ が 8 がい < 1= 6 づ b 12 速 で笑ひ 眠 て見 太 な な 思 近 なし で ţ カン な 居 ٤ ž 店 it 建 発 Æ, 3 7: カン L 6. 3 n 7 3 b 3 郎郎 金 1: n b 貝塚 个治 熊本 兵 字 岡 べい 馬取 岡 憤 Щ 部 Ш ili 縣笑 市 thi 市貴美女 孫弓削 iff 大 [17] [ii] [11] [11] 夏 同同 [ii] 同 同 同同间 [11] [ii] 间 游 [1] [17] 11 同 平 風 泉 司 形法 生 こっからが底だとバス 病院 **空瓶を持つたがお氣に** 灰皿 **背**廣服 帰り 窓知つて上手な監が書 愛情がとばれ落ちそな 療養のひねもすほうれん草を喰ひ 茶宝など健てゝ我が世を讃め称たる 階段はいつも彼女に遇 大八八 許すまじっ よその子が際かれっる子連れ戻 研究所出れば 湿厚篤実へイー 首切りで初 心中の親うちの娘がだまされ 屋台店たまのお客が粗そうする 恋に膨ちやたらに赤をけなすなり こつそりと妄が読んでる 本妻か二号か 映画館娘メ ねころびて の意にそむけば雨 0) へ行ぐのに經濟手 間 で 淶 で耐乏を說くよ 步 金

これ

0)

和

倘

3

h

鳥取市

満子

τ

ガの

金を受け

日.同同

たずまいがわかる清新な雰囲

(,

生

活

大阪市花

村

1:

[4 が 8

ほど 今度

は

煙をあ

if

同同

と役立たず

ふさころ

石

刑

縣陽

×

櫻が唉

4.

同同

どら て居

貝塚市千

仇

h # る

山雨樓= この句は作者として

**否打ちを聞かせるやうにする少女** 打ち連れで出るは映画を観るつも 産児制限何処吹く風の産みつぶり 葉だに無き木の間から伊予の 女の愛を待 我を t 1 連 そ n 去 つ U て來る つ勿 りし 避 ځ て 衣 如E 力。 立 0 13 ち 法 人 苺 111 今治 遊賀縣 阿 同 認 今治 受 知縣此 市松 īlī 同同 同同 國 同 同 同同 平 花 郎 柳の新方面目の開拓に査する そんな意味の新しさは川柳に もまたここにある。 はあくまで自由であるが、川 は思われない。 新しい生命を吹き込むものと 方面から離れたものである。 しさは川柳のモチーブを培う ある点にある。 れた着想として旧套を脱して れば、それは辰二氏が指摘さ し新しさが感じられるとす

3

游

師

7=

び

也

自 义

3

ガ

ネ

うでゐて作者のひかえめのた ものとはおよそ縁遠いど思う 変も來ず 母は楽ずたのんだ梅の 郎= なんでもない句のよ 阅 乃

が、句感は淸新なものとは言れて女性らしい句だとは思う 句を强めている。そして一抹 の淋しさやる潮なさも感じら 現辰 おとなしい点だけが採りたい い難い。可もなく不可もなく **氣を與えてくれる。ここにも** に耳触りにならないのみか 柳の願いがたちこめている 二一「來す」の反覆が表 句感は清新なものとは言

しかしこの新 重する根機 この句に ある句である。自分は川柳塔 情緒の陶酔から現実の面に引梅と云う酸つばいものを配しれと不安と寂しささを彩るに おつた。 を再読しながらつい看過して にじませている。 下してどことなく川柳の味を と不安と寂しさとを彩るに 近頃さびの

ならん (正思)

川柳の行き方

山雨樓= 性を憤つた氣持がよく表われかけるため利用する卑しい根 するのでなく或金ぶりを見せ ものだが、藝術を尊重し鑑賞 に大観の絵が買われたと聞い に深い反省と問題とを提供し ている。 ろうとその心を察して詠んだ て、大観は定めしなげくであ 同時に藝術の商品性 ヤミの 新興或金の

ている。 桃谷順天館

の立場から詠つたものではな 振幅のある手法を選んだので の心事を祭して小説のような 肉親の間柄の日常茶 か切ない氣持が 別居して あこが つてそ 民 が泣くであろうとむき出 きでないことがわかる。大観 て來ておろそかに句材とすべ でつつこんで考えるところ らどう思うかというところま に、作者以前の意識がわかつ 郎 大観がこの 句を見

H

は

别

Ė

持ち

兵草縣齊

花

むしろ娘の側に立

75

計

U

B

うて 始 越

大阪

市定

美

あろう。

飯事に過ぎないが、

流

読

17 手

3 紙 入り

同

公約は空手形だとは 文学少女にして綺麗 会ふ日へ肩 0 柩 12 な 0 < 细 b 死 淋 人 語 7 S B Ġ ず 兵 F 庫縣 関 ili JL 同同 [1] 鬼 消説へ二 たいの 職 号 眼 公僕と そ 行

月影に月 カルタ会袖の ほれんへと HII U の 記 隅 供 旅 横顔見入る日もあ る 長さも邪 H 行 D) から 0 鞄 ß 2 カン 審 ほ 12 0) 忘 5 b 見 魔 3. < n 1 12 < 2 で 5 Č, 会 だ せ 淋 山 b 2 h n n し ž T Ti. 石川 石 川 III 縣 縣 茶撫 同 111 同 [6] 11 uj 味 [ii] 平 Liji

浪 店を立つ**隣**ふて甲斐なき我なれば 毒舌の烈し 食事中恐れ 内職の暮し 入 へ稅 3 あ þ ます 並み n が 借 父 0 だ り電 から ろ 3 話 す 今治 小 松市茶 ili 伶 可 同 佛

見合では眼鏡をかけてゐなかつ

た 女

同 益

可

宝くじだけが望みださり

話

で

は

0)

女

房

ŧ

好 な で

V から

東京

志

いゝ心臟署長

句

H

否

h

1.

風 基準法そつ 眼を閉ぢて口づけ待てり小さき 縄暖簾頭で 反抗に学校 分け B ح め 触 n T て 働 T 悔 3 < Z 模 ŧ ع T 範 な L 2 大阪 佐賀縣え Thi 棐 同 同 光 z

國宝へつきあたりり

奈

良

步

メーデーを資本家だけの目で眺め

大车

H

風

女故許さ

n

て

あ

3

忽

な

b <

同同

振り返る方よりあちら

美 粗

人

なり

大阪

īþi

旅

デーの殿

り足はい

12

7:

が

b

u

いつそ休ま うか

4:

は

動

カン

す・

[11] 同

判一つこれが不幸にならう 素顏とは似つかぬ嫁が手を引かれ サル芝居八百屋お七がのみを取り

8

は。

岡

Щ

働らくぞ働らきが 結局はマル 珍客に亭主 炊事下駄手縫いの鼻緒ばかりなり 酒をとも言 今ず淋しい ク お ス 論 b 111 箸を 行 す < 0 暮 b 取 U b b 石川 尼 崎市ち 縣自 同 同 か子 游

> 辰 3

=

只物質に

0)

み生

失職

0) 0)

目 迟

60

飯

ie ^ }

恐

< づ

みる

大阪

府き

はち

11

説計図建てる資金はな

V

な

[11]

いは

兒

の

II. から

3

愛媛

縣

抓

峰

奮起は、

てでなく、

べきであろう。

料

配

家

Ė

金借りる度

性

を

<

す僕

加のプラ

ン

r 個

笑 4111:

hi ui

と ころてんアイ

スキャンデーに食けまして

Ř.

賀縣こ

豆

[ii]

ぐむきになる癖孤独になれてるる

曜

の

間

借

3

ぢ

蓟

目 で

立:

0

b 3

長野

縣

兒

不

覺にもよだれをたれて寝てきった

ス

カ

1

ŀ

町

を行

[ii] [1]

b

大

分

表

情

麦めしの上

で

恋する

B せき か

居

b

奈良

縣字都羅

子まだ親の温みのま

۲ を

び ふ

同

雨樓

宿を頼む方であわ

大

阪

0

U

خع

恋

神戶

子

辞儀する

9

宿

つりて貧しきにもあら

焼け跡に他人の家が建 会長になって亭主の智 花吹雪下戸で青痴をあ

5 慧

> 要 £

b in <

同同

拘 病 つて居る証 得をうら 價 韶 床 脑 所 18 條件 机 子. 喜 Ś 0 上 丈を 卒 ブ L ラ T " カュ ポ 0 プのはずみ 聞 3 illi. 0 " < h を 卒 ]] IJ 横 D 見 業 言 沈 深 証 樣 L < L 烏取 東 應 和京 見島萃 縣 武 遊 u II ii 星 水 雄

鈍い。

いと思う。

ほどのものではなく、

は看取される。

麻 生 路 郎 奢 水 武 書 房

版



々喷評好

か」から說き起して收むるところ三十七講、平明で親切で、初指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはごんなも ある。敢て一聽を薦む。ことが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好鑫考書でことが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好鑫考書で 者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得する 本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書 B 6版 柳紫 金三〇 初るの新 社页

受ける感銘のにぶさが れ、こんなところに止まつて の変易性を物語るものと見ら ゐなければ句ができぬ作者の 取灰御注文は つて、 3 てこの 句 川柳 から ある。 屋の小面憎さに痛憤した句 なほど下 描 いて、 世の中はさか ・手に出 近頃のおうへいな宿 ている態度 誌

い放

けるが何想も表現も頭が下る の旬から受ける氣持は極めて は看取される。それだけは頂飾り立てるという世相の一面 理解もなく高價だから買って 作者の更に精進が望み ただに川柳作家とし 文化人として窒ま の帳場えお 私のこ 帆) 3 卒業したつもりであるから、民 郎= 私にはこうした句を 吟と云つてもよいであろう。 よくうかがわれる。 余程すぐれた着想と内容を包 ら訳のわからぬ句と云われて 强する時代になれば何の事や 宿屋がサービス第一主義を勉 の句とも取 ることを諷刺している氣持が にうとくなつてきている。そ 含されたものでないと感受性 を刺した句である。 も仕方がない。 い社会の有 私にはこうした句を 様を憤慨した時事 れるがなげかわし あくまで時代 作者自嘲 さまであ

概にいえないのではないかとれは私個人の思い上りだと一

天下取る手相 長 屋 で 飯を炊く兵庫縣尊 [Ju

効目をば無視して二人温泉をきり 鐘のきず皆弁慶の所 破門する和尚も味は知つて居り 再婚をせぬ 口紅 再婚を祕めて花嫁らしく寝る 自動扉はさまれたのは車掌 あんな女と笑つてゐたが好きになり つかれたと 云表情 下駄の歯のへり様 バコ錢惜しんだ妻は帯を買ひ のぼり父は帰還をする予感 重櫻廻り廊下で手が届き バンに合はぬ恋とて思ひ切り がうすく やはり居候 を帽子でし 爲 15 なり なり す 大车田 愛知縣勉 大阪市五 大阪 岡山 熊本市室 滋賀縣美 縣滿 thi 强 同 久 QIS. 牛 秋 华

冷

水

葉櫻の馬場の長さをなっか 老母一人残る留守居の、火を思ふ 丸亀市浪 ストに足どられてまゝよ雨と慰る 私鉄ストの日 0) しみ 同 同

芦

晴着と一緒に他人手に渡るするシ

の度に薄

給愚痴

5

n

3

名古屋鳳

石

家

きの娘に

男押

L

カン

ける池田

市木

声

金づまり何処吹く風とスクーター

敗 残

0

名

で

b

師走(隣ぢや 久し振り雜誌で背をたゝ か 道草の子を自轉車で呼 逝つた子の手あかが殘 うれしさは釈放の日 貯金局むやみに統計出 無雜作に布團に座るボ お茶文けで済して臭れ 十二月借家を明けて吳 茶 碗 び 8 る参考書 n L ス 青い空 タイ 7: 12 仲 げ ح 言 やる 人口 7n が 斉 .3. プ 石川 石川 石川縣魯 石川縣東代女 岡山縣ひろし 縣光 縣醉 同 同 郎 半 木

田田

胃

痛・胃潰瘍に…

うぐいすの声に自轉車降りて見る あわてもの二等へとび込みままありて どぶろくの栓青空へぽんと飛び ちんどんやのかせぎで女学校にき 冬オーバ着てサンマータイム切替る 新世帯乏しい調度置きまどい 部端へベタく、貼つた四月馬 当直室時計は大きく音を 当直でしんみり故郷へ手 ある時は妻も碧空眺 過去の日を一人で笑うことがあり 出世する易へ少々こそばゆし 貰ひ風呂御主人よりも 先 に 入 り ランドセル学校へ行く真似をする ばろ儲もうありません 鍬を持ち てれかくしの莨が切れていてある 汽関車の煙が景色の邪 、ほどはたよりにきぬ山車の稚兒 い出のマートも今ははでになる大阪市一 きやけたお陰を忘れ器 快え櫻 制の話小声になつて來 飴の慾張る程に たかろ寒かろ親 ム長を假いた娘 権が不平女房 の花が眞 の の 魔になり つ盛り 紙 め が 苦勞性 てる つげ 誉 3 鹿 脚 ž n 新居浜明 姫路市和 同 岡山縣道 岡山縣一 岡山縣清 大牟田 東京都天 次阪市惠 香川縣迷 愛媛縣旭 大阪市 大阪府桃 大阪市草 高知縣元 石川縣夢 鳥取縣夕 下関市紫 大阪市純 大阪市重 葉菜子 同 Fi 三郎 坊 風窓 童 水 村 右 信 馬

うだけで表現の力が足らな 思われない。むしろ平淡とい してこれまた傑出した句とは **氣のつく事ではあるが川柳と** 相違ない。宿に行つて時には こんな世界を生み出したには 辰 四囲を見るのである。 | | 敗戦後の食糧事情は

## みの蟲のなんぼ匍うて も壁だつた 豆豆

思う。 は川柳に又すて難いよさだと てゐる。恬淡なこうした氣分 つて、事もなげに描写し切つ 観的なみの蟲の生態に目をや るが、作者は心にくいほど客 のが此の句からも滲み出て來 似た敗戦後の氣持、そんなも 含みを持つてゐる。虚脱にも → 軽い句であるが相当

民 と思うことがしばし ばであ 下つてゐるのではあるまいか 解し難いところまでレベルが が多くのひとたちによつて理 易い。そうしてこの句の暗示 的客観句が本誌では見失われ 郎= こうした老練な主観

示の手法を通じてこの句が語 山雨樓= 僕はこの句の知性を る恬淡、虚無、諦観と云つた 余り高く買わない。 速の思想系列は、ひいき目 寓意

大阪・武田臨品工業株式會社

ものを感じる。 反逆した生態描写に何か異な 謠が物語る一所常住の習性に て「みの蟲ぶーらぶら」の童 い。そして表現の上から云つ に見ても新味は感じら

## 流るるよ 金出して見たまえ米は 林)

う。此の点で敢てこの句を提 が、現代のうがち句である られてゐる國民にその世相の 辰 二= これは流行句で不易 出した。 な何でもない表現に過ぎな 面から見ればこれも誠に單純 の混乱し闇屋叉闇屋で苦しめ 句ではない。平易な口語でこ 面を端的についてゐる。

光るのである。さして奇拔な の詠嘆技法によつてこの句は 力 がひらめいたことで あろう 0 句想でないがためにつまらな い句のように見えるが、時代 流れを知つてゐる作者の頭 耶一 下五の「流るるよ」

うで、政策の貧困を諷刺した 山雨楼= から大分ふつ飛んでゐる。 苦悩の現段階はもうこの表現 ものと解するが、國民生活の さでもあるまいとさとつたふ につく。今更闇経濟えのえん 一寸氣取つた語が耳

堀 口 塊

のである。即ち、東を西と改称 太陽を西から出す事は易々たる

軍閥の了見はごうして もわか ら事能を以つて、神道の聖書とした おれは猥雑なる民俗良を断片的に が描かれて居る。血で血を洗ふ酸 なる天皇が在る。嫉妬に狂ふ皇后 綴つたものである。そこには暴虐 よん切られたであらう。併し古 その出所が明かであっても首をち こんな文字を発表すれば、如何にをうかがふ事が出來る。職時中、 に、皇統が絶えんとした事である。 ら雄器、武烈なり継体に至が間 嘘が交つて居る事である。それか に、どう勘定してみても五六百 め。試みに一流してみるがよい。 いのである。古筆記によつてそれ 絶えんとしたごころか頗るあやし

体を把握する者こそ、神であり佛 北あらんや、虚無の彼方にある絶 る。本來東西無し、いづくにか南 ぶくのが、迷える羊人類の常であ ら出る事は不減の眞理だ」とうそ の名称の如く錯覚し「太陽が東か である。その仮称に拘泥して絶体 すればよいのだ。東、それは仮称

> でもない。後年御用學者が歪曲し められたものでもかくされたもの 日本書紀は文体も整ひ、

されてもよいのではないか。この 恵的な話よりも、もつとく、普及 な話は、民の税を減じたといふ恩 感じて早速その佐伯部を左遷され がきこえなくなってしまった。あ て居られたが、いつからかその声 宮に在つて毎夜、鹿の遠音を聞い たといふのである。この、人間的 鹿を献上した。帝は非常に不興を る日莬我野の佐伯部が射殺した牡 はるかに好きである。帝は高津の これよりも免我野の鹿の話の方が 故事がのつて居るけれざも、私は 見て「脱既に富めり」と言はれた な仁徳帝の、百性の税を軽減して 三年後、民屋より炊煙の盛なるを たものと思はれる。その中に有名 されて來たので、その系図を作つ 頃、國家としての偉容が漸く整備 て家柄を製造したやうに、文武の の成上りの武士が系図屋に依頼し る系図ではあるまいか。江戸時代 貫して居るが、これは、作られた

あるのみである。聖武帝は佛教に 弁慶が初進帳の中で読むところで やな他の建立を発願されたのは、 最愛の后に先立たれたので、るし 淫する程の人であつたらしいが、 には神楽天皇はなく人間天皇の姿 つて居る。とにかく、古代の史書 図絵次成にも、挿絵入で説明がの だ事は、紀配のみならず攝津名所 皇后が非常に知心の深い人であつ 史家の作為を不愉快に思ふ。帝の 話を歴史の教科書に忘れた御用歴 は明治・穴正・昭和の誰かであ と言ふべきであろう。 歴史を似作した歴史家こそ、國賊 生れたのである。まことにかくる に、六平洋戦争の神風竹槍戦術が る。こんな歴史が普及されたため つの間にやら神風にすりかえたの といふ事になつて居る。それをい 時につまらぬ風が吹いたものだ、 の文字であるが、あとはいらざる 相模太郎胆かめの如し、とは山陽 学的な事は書いて居ない。成程、 屋の頓山陽といへごもそんな非科 説は誰の製造であらうか。勤王 元冠の役に神風が吹いたといふ

て居る。 としてお書きになったやうに承つ 東宮御学問所時代に、歴史の答案

が。但し、これは塊人製造の俗説的恋愛を実験したといふのであ である。 なつたものらしい。即ち彼は勤王 を乱し、清和の後宮にも手をつ むるにあつた。そこで仁明の後宮 物にして藤原氏の勢力を失墜せし 保親王の子、在原の業平である。 の子女を皇后又は中宮に奉つたの ふて天皇の外戚たらんとして、そ け、終に二條の后と芥川の道行と 彼の漁色の目的はかくる子女を庇 であるが、これに憤慨したのは阿 藤原氏全盛の頃、その宗族は競

でありながら、中途に於て中宮廉健樹帝は、そのはじめ英明の天子 まらぬ男であつたらしいが、足利 いふべきである。これに比して後 つたのであるから、奇骨ある士と ごでありながらその節を曲げなか 方の梅櫻論には道賊と書かれるほ あつたらしい。正成の如きは足利 尊氏や楠木正成は敦養のる武將で よつて想像すると高師直は頗るつ 振津の多田院に現在する文書に

た民族的本能か、それとも教育にのものか。又、君達の愛する心そのものは、歴史によつて醸成されて、君達の愛する心そ

その君達の愛する天皇とは、天皇

くの人はこれを愛敬して居たり

神聖天皇が人間天皇になつても

もつとこれを考へてみやうではな

日本歴史をひもとく者が誰しも

まに祀されて居る。日本歴史に歪 していたづらする事すら る。トイレツトに入つた婦人に対 いふ文字をいたるところに散見す

あからさ

が盛であつたために國費を浪費

ある。この朝あまりに佛寺の建立

現在の裕仁天皇が、学習院時代か、 し、國土が疲弊した事については、 よつて育成された後天的習慣性な

戦がある。「数まりせり」なごと

か。我々は愛する者のために、

茶喫

上六交叉点西北角

外食券食堂

围 品



見送りの航路アメリカまで続き 見送りの故郷は午夢をうんこくれ 見送りの朝へ時計卷いて寝 見送のどの人も皆然げて 打解けた娘へ其処迄見 愛人を見送る月の良 見送りの潮時給仕こしるへて 様々な眼に見送られスサ

送ら .

3 5

太松溪內浪風抱草

湖雄子海二浪逸

見送りの子供鞄を持ちたが

**v**] 3

業式今日は恩師に見登ら

見送りの人へからくを舞ふて行き 見送りに混つて母のみすばらし 娘を送る母の瞳は動かな

貧しい

父目

入

仕合せを祈つて女送ら

れ実

見念、の無日な友の真実味一年に登校にみんなに見診られ

生酶耕幸花秋吐安奖舖

エプロンの自さで凄に見送られ 親しさはエプロン掛けない送り 打明しせず華やかに見送られ 遠くから見送つている瞳と約し

元稜三七 花面 馬峰堂山

弓削平

日

あゝハンカチがハンカチがらう見なぬドロくとに酔ぶて幸で見珍られ

見送つてから本当の解が出る 見近りの妻へ戸締り繰 辨当と共に出勤見送ら 見途りは母の背中で寢てしま

返

È n

1,

発車ベルもう外聞もあらばこそ 終列車艇なさんなやと見送られ 里へ行く後姿に惚れ直と

不柳茶

発車した窓へ口礼する ばか跡航へあの人だけの 目が 残

v) 1)

花

えいを

皆んなによう言ふてやと見送ら 其の中の多数が高理の御見送り

け

たま

御得意として看護婦に見送られ

見送りは淋じいものにする乙女

路月人花村男平哲泉美路川城

見珍りをも一度しゅべらす発車ベル 見送りが小さくなるとで振り返り

ら小路 る

成 弘

42

休

選

見送の女同志は納を發

曳かれ

をしめて駅まで送る若 一送りの場になる舞台雪が降り 郎は、西園寺公望の側近の人であ 書いてもよかつたと思ふであら る」とかの見出しを読んだだけで の妻を奪ふて三韓の背反之より起 靖其兄を殺す」とか「雄器、臣下 この「二千五百年史」の中の「約 史」にも明記するところである。 た。これは杉浦重剛の裕仁天皇に つ。からる歴史を書いた竹越與三 のした長田幹彦なんかは、もつと も、最近「天皇」といふ小説をも 発行の竹越與三郎の「二千五百年 も特肥してあるし、明治二十九年 対する「倫理御進講草案」の中に 子の愛に溺れ頗る民望を失はれ

たせた日本と、どろらが返に天皇大正天皇に対し長くそとに位を得

を受して居たのであらうか。

(昭和二四・四・二九)

浜

かしだが)は中すに及ばす近郷近これは僕の町(最近町になったば 月餅をごつそり持つて帰られた家 ざいのは元五の晩に月舞にれて正 在の村や部落が血膜になってやつ ところが泥君一同夜音などは元 総横無違に売し回るの

目に年末から年於へかけて一

ている混棒壁退方策である。

枠がはやるので夜費とする。

識るべきである。

位を除いた英國と、腦を病まれた

がある―

MAN TO THE PARTY OF THE PARTY O

課

題

岭

天皇個人の自由のためにその

り、殺励の何沙汰を非辞した人で

もある。これにょつてみても明治

夜野は一晩に二人、二十時から

に一度廻つて來るこの夜碧を、村するのである。一温間が十日の間 ら夜の夜中を一時間わき位に巡回 のつき合いとは云いながら実に馬 が降りて來になめと話し合いなが 戸毎にぐる人、見て辿るいが仕事 で、雨が降ろうと雪が降ろうと霜 四時過ぎるで三十二軒の部落を一

荷物を投げ捨てム逃げるか、これ騒音に包まれるのである。泥君はな具合で数分のうちに部落全体が 家はまたプリキ罐をたいく。こん てはいけない――これを聞いた隣狭して仕事をしている時はたゝい らえて出て行こうとする時、戶外 のある時、または泥棒が荷をこし なつた。それは各戸にブリキ罐、 けておく、そして泥棒が入る氣配 金だらいのような物を一つ備えつ へ飛べ出してアリキ線をたろく、 れ以上の対策はないということに ブリキ罐をたくことに考が落ち も線を切られてはなんにもならな えられる、各戸にベルで連絡して 一つの名案を考へ出したのである い。――など」考へた宋バケッか 進駐軍が笑うかも知れぬが、こ いて等防閉に和談して見た。 半鐘を鳴らしては火事とまちが

が來たので、待つてましたとブリそれから三日程して本物の泥君

ということになつた。

をやつたところ非常に調子がよい

るところとなり、二晩程予行演習といつた方法が忽ち町民の特成す

きがすむまで家の中を警戒する、 た各戸には留守番が起きていて騒 方向を示して泥棒を追跡する、ま 箇所に集つてくると、勢防則長は

見送りはもうよいしと里の 見送りの医省へ義足は駈けて見せ 見送りの母つぎくし言傳ける 見送つてそつと容体聞く玄 見送つてそれから妻は忙し 見送りのテープ撮つたまるま切 見送つた妻子の顔が又浮か 見送るはまつすぐ帰つてもらうため ではことでお別れします療养所 関

天・もうことで別れなさいと橋があり 地・さよならが言へる子供を差上ける 人・見送りは娘にさせたい 親の腹 轉校の先生にざやかに送られる 見送りのとうノイレールだけになり 見送りに馴れきつて居る尾灯 夫婦して子を見送つた炬燵に居 牛庸茶瑞甦花水夏幸 休司佛川光村客波花鶴郎光客司水

ブリキ織の鳴る科

発車ベルだまつて妻はうなっきぬ

見送りの犬改礼をねげてくる 

に泥棒をげき退したのである。 キ織の鳴る村を現出してたちまち い。各戸にはアリキ雛が演習にへいたが三ケ月もたつが 浸 入 し ないれから、泥君は風の便りに聞 他の中は

電燈を持つて飛び出して指定した にこりて再び訪問する気持を失う 方一戸に一人屈强な人が懐中

鹿らしいような気がして――僕は のである。

夫

0

男

岸

柳

山竹 幸

雨楼林

むからく

百四紙祭はいただかれ

伊志田孝三郎

11

柳子

配給のつりへ五銭の近れ

よう

高

三山佛明村

物凄い札束へ目の置きごころ

が一枚きりの

花

弘

vJ

三光光坊

同路、水

客



投稿清規

# 切毎月世五日▼投稿先本社宛藤▼粛崖月日及場所記入▲締東日祖は原稿用紙▼文字を正

# 朝日新聞社後援

ト●フエア

全國川

表とし、席題は父母に渡ることとした。 池遊園地に於て開催(六会印事参照) 諒とされたい。 ▼本毎には誌面の都合上、兼題のみの務 五月八日午前十時から近鉄沿線あやめ

兼題 南 春 Fi 生 路 郎

波に足洗はせてゐるアダム・イヴ 若さ日の班へ南地の灯がしみる 父の眼に青春損なことばかり 青春を素通りにして病みつじ 音春の綺麗な嘘にだまされ 青春を意識あらしめ 夢多き頃かな 寄春の醉えば炭坑 傳言板に溢れるせ 濶さ唇を盗まれる 手 紙 τ 祀 節 姙 f 1-押 15 12 周 雨 きはち 太郎 曲 逸 江

柳大 天・雷春を捨てに支線の汽車に乗り 地・密泰をあへなく女中して過し ・ 青春を吞むべく生れ來し如し ・青春は南に北に捨てム來た 五. 改 音春にグッドバイする見が生れ 青春やはんばの恋を続ける 音楽をあたらカストリのみに生き 一体をよそに尼とは凡 月の 1,F 春を大平洋に捧げた愚 兼思 陽改良 改 段 苗へ 4.

大谷五花村

百円紙幣の個性館買う程のもの 嘲笑をされに世に出た五銭紙幣 守錢奴と云はれる紙幣の鐵を伸し 丸うしてさい銭箱へ紙幣を投げ 胴巻の紙幣がメンドをかたくさせ 礼入れに紙幣一枚わびしそう 紙房に似たサッくれる 紙 房

> 德 貴茶

兎

へそくりへ新の紙幣をおつている

さて、金のことで改良ゆきづまり 改良は先づ父親の頭 改良へ子供のちたのあなどれず 地震國改良したい家ばかり 改良をした教科書に無駄があり ニュールツク世に出る迄の無性髭 オイそれと改良出來的石 改良をしては他人に儲けら 改良種ですと声瓜のふくれ バイヤーの眼に改良の余地はかり 改良の農具え秋をでする 改良のチャンス若さが盛りあがり 燈 斑 から 々と 丽 n 7. 燕 竹 刃 77 狸 五 源 鱼占 H 村 77] DIS. 坊 菜 美

> ゆふべ否んだ杯の数紙幣の数 窓口で流むは他人の紙幣ばかり 紙くずにならぬ紙幣の面自し

> > はるを

柳 更

天・紙幣東の悲哀日方に量ら 地・酔ふてゐる手から紙幣が面白し 人・破れてる紙幣へお釣も破れてる 起度をされて紙幣束積む夜なり 五銭紙除今日配給に用が お祝ひの紙幣にきれいな紙幣を撰り 紙幣よむ手女だまつて見つめて居 息する生 消へてゆくにきれいな紙幣に替へ 活紙幣 爽返 あ n ij て È 絲之助 腈. 葉 万 あきら 77] 笑 柳 光

兼迎 一温 泉 浜田久米雄選

改良の

話

DS

続く妻

揚

休 夫

上

it

改良を言へば農家は笑ふだけ

同

温泉へ來て滯納の質 旧 働いた金 一派の中 泉でころの病びと笑 友と逢ふ温泉町 泉で開屋如きに見 効くやら温泉酒うまし では話めた指 温泉も好い 下 で (1) 3 2. け Ŋ 75 75 0,0 6 3 È 節 櫻 柳 花 源 美慶笑村花 太坊

青春のひとこは嫁く娘の耳られ

音春の今日も疲れた灯がともり

冬思夫

灭

都会から 顔

を改良して反

IE. 旅

青春がやせる薬をのんである 野衆を忘れ二人の子を育て ほんまかいな音春のない立志傅

花代子

青春の息吹を吳れて投げる

球

弓削平

地・改良品夜店へおちて賣れ残り

お勝手を使ひ良くして妻若

土地改良百姓馬鹿で出來まへん 容疑者に新演法のありがたさ 改良事にはふれぬ値 ガスひけて読書の時間妻も持ち

つとむ

朗

鞍 水 竹

馬亦

地・温泉へ來てまで月給 取 ひが・人・温泉の朝を明るくバス が 荒っ 天・山の湯へわが本心をつかみに來 温泉の街の夜霧に挑む 温泉の効めは母が先に 温泉の思ひ出があり岩田 温泉のプランもあつて 宝 くじ 前件の作家に種もない 夜の雨温泉街は 色々な香に 湯の宿の下駄の響きも春となり 温泉場皆んな儲け 温の町の按摩ゆるノーもむはかり 新妻の名を温泉で呼び 温泉を出て現実につき 温泉の話も人 温泉 情話めき 街幕れる 7: 3 原 いでゆ 樣 馴 身 な顔 稿 n 知 3 3 る 1) V) 松太郎 冬思 夫男 周 ガよし Ħ Œ **人太郎** 虎 治 兎 水王

兼題 風 尼 綠之助選

たしなみをみせて女は風へ向き 春の風淡路通いの汽笛 許されて仰ぐ衂族が風に 汽笛今潮風に散る港の 峠から風が持つて來る馬の鈴 ちつぼけな意地をひゃかは様な風 風のある朝がられしい 鯉 幟 風の夜に言葉の際を捉へら この風の中を郵便配達 背の子へ風が出て來た風 風に問び風に答へて船に パラツクへ風は同情心 輕るがると拔毛さびしや風にのり 急行車風を残してまが待 儲け口何をと風にい ごんでる 身を風 物に風が來てゐる が寝か 48 3 舟告 f 筲 7: H) 酒 世 75 Ø 9 せ V) 灯 vj n 夫 車 3 帶 ζ P 兎 み 昌 子 穂 雄 桂太郎 茶撫郎 42 清 文 鮨 生 瞯 庫美郎 子路

・容れられぬ故郷の山

水飲し

掬三石朗林

仲人が助けてくれた山水

水の美へ溶けこんで鮎を釣る

奇香同久符錦柳花

情はよし田水の美しさ

水の軸から変める初 水のいと麗し 水の軸借り物で好を取

対

食えぬ

v)

24

朗明風笑科花光明司男

JII

水の一軸掛けて清く生き 水の襖税更はほめて

か

水を耐く奈良墨がといけられ

東題一続 7 本 ጉ 冬

P.

・山紫水明を愛で、の國は起いた云ふ

水を賞める左遷の駅に降り

德

毛糸編む粒子に近い寄る春の色 貼税務所の紙がある稿子に掛け 奇 同 知 Ø5

特種をうす(知つた運

万

父

0

月給僕

0)

月

給

母

注

者

哲

水

の記事へ虎徹のような味

天・花の散る風へおでんや炭がはれ地・履歴書を軽く飛ばしたドアの風 人・街蘇のマイクと孤見は風に立ち 委託所の隅に山水うらぶれて 風しかとネッカチーフへ受とめる 風を待つ蜘蛛真剣に身 くじ賣りの目つきが変る街の風 峽を下つた頃の酒 紫水川郡はここから伐り出され 兼题 を Ηij 巾 水 人 柑 構える 榎 妆 H 竹 林 4 词 小 水幽伊鞍 山 水

界給の話へ椅子の向をかへ

の於子にいつかわ座る職義録

松冬思夫

当然のやうに課長の椅子にづき あこがれの椅子スを人に追び越され 椅子すとめながら日実 老へる 籐椅子の下で跳れてる。

零价交哲

蝶

松面平王掉馬

選

新任の松子へまぶして陽があたり

定

人情のうすさを椅子が笑つてる

1

天・椅子くるり廻せば街が見むるさる 人・随ちて行く身でスタンドの椅子へ投げ 地・おしくない椅子だが今日もすわったる 福融論毛皮の椅子へ灰が落ち 云ひ負はて來た人と知る於子の脚 剃刀へ命あづけて理髪椅子 高利貸す部屋の一脚バネが折れ 並合せ戦めば椅子を持つてくる 新任の椅子から侮辱されてゐる 椅子深くかけて社長は喋らない かごらせる椅子は上手な口をき、 選体み彼女の椅子にかけて見る 毛の抜けた椅子で冷たく待たされる 1 花代子 白溪子 松太郎 小松園 総之助 大 同 男

小 種 HÍ 111 佢 健

選

住みなれて役にあかぬ山とい

せょらぎに旅愁が沁みる山の宿

水低の値で置ら

7

も川も春その中に花の と水しばしは党も主義もなし 水を掛けて二世も茶に

<u>생</u>

客

雨楼

休

絲之助

滴

特種を仮繃帶のまゝで書き特種へ内の電話は故障です 特種をカメラ提へた音になり特種へ編輯長という笑顔 特種の事なぞ云はず記者が訪い特種へ記事組替のす しが 來る 特種へペンとカメラの腕を見せ 特種と思へば皆な知つている 老らくの恋特種と書きならべ 特種をとる足許を犬が嗅 種を摑人に記者の瞳のうごき ĸ 大大阪は寒静 まり 笑 はるを 松太郎 青丹子 花 草 風 代子 泉朗

> 通訳へ指で知らせるケラー女史 通訳のとつてもきれいな日本語

松太郎

室

久

通訳の目に不甲斐な、日本人 スラングで通訳一寸からかはれ

綠之助

旅

風山

通訳が値切ると変な目でみられ

ń

給 宫 FII 天・通歌の終言少し聞きとれず地・通歌へ別な頭を下げて置き 人・通訳のいらぬ旧知の学の温み

兼題一月 不

地・赤インク特種と云う使いよう ・特種へあくまで記者の無表情 特種と前 ポケットに特種があり深 安協していて特種せしめる気 特種にされて娘はまだ嫁 特種へ電話感皮のも ごか しさ 特だれは第六感の途中 特種を流 石日 e 7 曜 下下に 娛 呼吸 下 樂 'מי 版 冬思夫 山柳子 冬思夫 聚 悠 竹牛 郎林休四

通 沢 **浊水風珠洞選** 

通訳を待たず大きい学を握り 通訳が來て叱つておられ事が知れ 通訳に通訳がいるも<br />
ごかしさ 通訳にだけ不気嫌がよく 判り 奈良の事夫通訳以上やつてのけ 通訳の笑つたとこで笑っとき 雲洞へ通訳さんも何か言い 通訳もせんべいを持つ奈良の鹿 通訳をしても女の身 だしな 通訳がチョト次廟は頭下げ ごつちにも笑はせ通訳笑ふなり 通訊のちと舌たるく 妻を呼び 通訳の或日日本語忘れかけ 通訳の或る日イデオロギーに触れ 沒食子 みち穂 貴同 葉竹安 無 松 源不甦 雄 坊

H 阪 謄

二五町田芝区北市阪大

阪 田

香九三六一

人・月給日佛の好きな物を買着望先つ月給袋から崩 天・月給に触れず信する 地・この倍もあればと思ふ月給 月給日たのもし講をせり下げる 月給で暮らす生活に花が咲き 月給日たらぬ同志がよつてくる 月給を数える指のフト淋し 月給へ小さい借を思ひ出 折つて 喫む煙 摩月給 日 は 遠 じ サラリーをダンスホールに蒔く若さ 直に去るサラリー袋しかと抱き 存む事に話がきまる月給 月給と別にはだかで憲はパン 月給に不服があつたプラカード 税金が高いと思ふ月給 足の出た月給賞ふに判が 月給日妻に風呂敷ことす 月給日つひ約束をしてし 月給は上らず妻はまたはら 月給を訊く失 月給の引つたでけばはれ 返り が、なな 1. 3. ţ, z H H v) 沒 昌 贵 若 鳳 茶 食 子 男 山 茶 石 佛 青丹子 あきら 耕同浪竹史琴井鳩五河 Ħ 二林葉四蛙花郎仙 星 逸 兄

## 香久山吟行詠草 兼題は前号に発表 (本社)

一村はずれ」 橋本綠

何時までも手を振つている付はずれ 訪ふ人とメツタリ会つた村はずれ 村はずれまで見送って涙ぐみ 村はずれ 道順の念を押してる村はずれ 村はずれ大和は寺の多 肩の荷へ少し重みの村はずれ 町の 娘の 荷を案じ いとこ 美奈子 白柳子 E 柳

自壁の家を教へる村はずれ風呂敷を包み直した村はずれ 嫁が來て村のはずれに家を建て 極道を母送り出す村はず 肩掛を一寸直して村へ入り 豆の葉がふくれて帰る村はずれ 白壁の家を教へる村 村はずれバスは待つててくれる也 道ばたに蕎麦乾してある村はずれ 建石の文字が読めない村はずれ 村はずれ高圧線低くすぎる 先登の曲るのが見える村はずれ 村はずれ火の見櫓がひとつ見え 未亡人の足袋の白さの村はずれ 風 雨

席題「アベック」 尾 崎 方 Œ 選

アベツクヘアベック一寸より返り アベックとみれば與様とゆう女中 アベックの春へホテルが出來上り ベックがかしこまってる裏千家 沒食子 瓜 TE 平 櫓

訳のやうにアジルルを花に止め

赤字だす赤字だんれと醉ふている

耗の厚さにすしの 蛸を切り

とんかつを喰いれ長に赤字なり

蛸日も死んだら赤くなりませう 蛸のいぼ隣みしめ乍らょくしゃべり

美しいアベックみんな振りかつり ひやかしになれて日傘の薩へ寄り そ手をつなぎませうよ花曇り

出たり入つたりいらし、アベックタイムです アベックに一寸昔を 偲んで見 アベックで行くには財布が淋してず アベック馴れらてる彼女の歩き様 スナツァへ一寸アベック照れてをり アベックで歩ゐて見たい春酸 系之助

アベックの今日一日が短かすぎ 吟行のアベツク皆にひやかされ アベヅクの疲れて次 を約 束 アベックで來れば大きな所見せ ベツクにはかり眼が行く茶店の娘 \* 非

ベックで來れば本日休みなり

村はずれシグナルの灯へ子を案と 進学の息子を送る村はずれ

村はずれ情別の娘は振返り

女の方が火たんなアベック アベックのどちらも同じ加工すし アベツクへトラックやけに鳴らすなり アベックの男が水をくみに立ち

抽象の話

結局儲からず

抽象派丸と四角で恋を描

介

アベツクを尼僧冷たい目で眺め アベックへもう二区ですとバスガール

アベックが寄りゃうて待つステーション お寺を水でアベックは道を替へ 探し合うてるアベツクのなんば駅 ベックに配給のパン焼いて來る

國宝の観音アベック振り向かず アベックが何んでもめたかもめてをり 蛇が出てきてアベツクの手を放

アベックなご見向るせゃにこい稼ぎ アベックにちがいはないが六十九 アベックの空想れんけ踏んでくる ベックの切符改札引つたくり ベックが廻れ右したデモの列 平

> 雜川 阿倍野支部句會 五月二十一日 (大阪)

> > 運動会ごころの沙汰でない赤字

抽象・蛸・赤字・追剝 **デル・あこがれ** 

蚊をはらひく、追剝時を 追剝へくだまき乍ら 皆 とら 追剝にあいいつべんに酔がさめ 追剝の情ステテコだけは 吳 **追剝に会ひましてんと費ひ込み** 家計簿はちつとも無駄のない赤字

於

王子神社

たまに逢ひ抽象的なことばかり 言ふことが抽象的で眠むくなり 恋か死か抽象論をもて あそぶ そのプラン具体的にと促がさ 火臣の抽象論にもて余 論敵は抽象論もまくこ あまる想ひを語る 白画自替抽象論は預 抽象語性教育のむずかしさ 象の魚青空を泳 瞳 \* **p**, 5 19

干した蛸土産に旅をまだ続け ゆで蛸にふとハチマキがらたくなり 借金を抽象的に云つて來る 酢蛸出たとこへ妓の顔が見 あわれあわれ酢蛸の足にいほがあり 蛸と呼ぶ見れば見る程よく似てる 吸ひつけば離さぬ蛸に魅力持ち 抽象とは教授ポケツトに手を入れて 黑・白・丸・三 角・抽 象 墨吹いて海の廣さに 蛸 逃 げて 路 鈍 光

> 長篇のモデルそれ程艶ならず モデルふと心の動く初夏となり 切り詰めた中にモデルは米を買 はにかみを見せてモデルは足を組 恋をしてモデルあつさりぬずきれる 追剝の方が時々ごもるな 合格だモデルと共に祝賀会 蝶人里路

あこがれへ十九二十才の爪のいる あこがれの内地の風ももう一歩 あこがれの大阪駅でチボに会ひ あこがれを子にも抱かせ生くる父 ちつぼけな事にあこがれ持てる母 宮さんの末路ダイヤはなかりょり モデル臍出して全たく無表 集團にモデルお尻も描がかれる

雜川 東京支部創立句會 五月五日 野 寮 - 寮 (東京)

於

岛

あこがれの大阪へ来てチボになり

事故・へそくり・汗・こごも 郎

ひとごとでない事故妻へ読み聞かせ 事故なしと書いて宿直飯にする 媾曳の時間はせまる 電車事故 妻今日も電車事故だと信じて居 先生へ小さい事故を告げに來る 同

リンタク屋余分にほとい汗を拭き 汗ばんでそれで嬉しいアダム・イヴ お人よし妻のへそくり迄も貸し 見栄はつて妻はへそくり皆んな出し につこりと笑つて出たは今朝のこと 電車事故選刻大きな類で來る 鼻の汗ふき (女よく喋り 汗どいふものが遊んでゐて流れ 火掃除へそくりが出て一寸揉め 事故もなく過ぎた牛生の味気なさ 古い手よなごと言われた事故運参 へそくりの妻には妻にある理館 、そくりをとがめ合つてる共稼 ひろし ひろし 登 守 郞 志

別れ話子供の処置で又流れ 言訳をする子の智惠をフト怖れ お世辞なご言へる子供で淋しるれ 子が先に釣れて親父は無口なり 子の寝顔明日のくらしはつゆ知られ 差押子供は知らずはしやいでる 子供にも大人にも奴もてるなり お帰りと子供飛びっき今日も無事 親よりもかせいで帰る乞食の子 小菅行子供は旅行と 信じ 切り 三度來て子供騙しはよし給 二坊

## 维川 久賀支部句會(山口縣)

腕白がやはりよかつた七度二分

こごもの日この子は今日も靴磨

同 好

叱られて夫の愛を信じきり

呢る・垣

土井の集ひ

三月十八日

品物を出すと人類くずれかけ 体験が叱る言葉をにぶらせる 叱られる先きに泣き出す手を覚え きつうには云はぬ涙が身にもるて

東

なつたもの、一読を薦む。

和樂路

たしなみで習つた唄で暮してか ホームラン又垣根からごなられる

惠伊路

発行所

於 不二俱樂部

かべれんぼ見てる子守も同じ年 同じ・袋・働く・カーテン ľ

のど自慢祝の席へ引きだされ 麦を踏む娘にしては惜しい咽

同じ値と聞いて大きいのをえらび 同封へ孫の清書が入れてあり い年叱言の度に引きだされ 猪太郎 蜂科呂

カーテンを閉めれは一日済んだ色 働きがあると言われて二 多也 働きが足らぬか給料足路みし 働けば何とかなるよと又言はれ 嫉妬するくせに女房を働らかせ 給料袋渡して靴のひもをとき 手土産の袋お米が二三升 手袋のま」で柏手打つ子だち 手袋をざこかへ忘れ三ケ日 同じもの買わればすまぬ見が二人 費つたも同じと一度はかえず品 働きを子供名前の貯金 轉宅のオヤツ袋をさいて 出し 今晩は泊る気米の ヌカ袋一番風呂の額で出 おんなじにされて不満な形見分 昔と同じそれで故郷はよい所 共産党おんなど愚痴を寄せ集め 釈 3 天満里 不句郎 不句郎 東

ませた口きいてゐるのはやみ屋の子

赤切れの手に握られた脅促

大胆な線で首相の 大担な事がやりたい十八 改心の鍬を握れば澄んだ空 胆 な音で洋 食喰ひ 質ができ 初め

明知らぬ男に何の席ながし 大牟田支部句會 (火牟田) Ė

仙

エプロンは若奥様と

樣

Ø 方が

稅

金 いふ自

竹

山風

三月十九日 於 三池染料管理課 得意・弁護・握る・大胆

奥様・人だかり

奥様が卵賣るのも子沢 P・T・A奥様負けない弁があり 妹の奥様振りを見て歸り 奥様の目にお隣りの子の行

こまざれを買ふ奥様のすまり

起き乍ら師匠が賞める背負投 得意中の得意さほごの歌でなし

傍聴を泣かせて弁護の汗を拭き お値段により弁護士 の舌 加減

握り箸母の給仕が待ち切れ 握り方から違ふ師匠の舞扇 頑張つて來いよと友は手を握り

しつかりと握つて行きなど子の使

凡

布哇支部 ウイロー社句會

人だかり中は共産党の 駅傳のラスト不安の人 だか

三月 古川魔花麗報 ヘハワイン

靴はいてまた一心き り立 ち話 靴ねいで集ふ個性を靴に見る 今日もまづ無事に勤めた泥の靴 意地張れば猶 窮 屈になるシユース

靴直し口からモダーへ針を出

医学博士 長谷川成一先生著

を諷殺する人。その奇骨、その柳眼が凝つて、戦禍を余所にこの快奢と 著者は世俗を超越して真に人間的に生きてゐる人。川柳では一徹と称し 「君などは恶貨の一人流行るべし」と金儲けにキユー~~たる医者仲間

振替口座大 大阪 三〇三九二〇万代西五丁目二 二二 番五

定價

五〇四

十六円

不 朽 洞

靴下の破れ気にせぬ 齢となり 朝の靴軽し希望の共稼ぎ 男やもめ白黒赤の靴 靴ずれに悩んだ母を想 ひ出し スカートへ土下座の様に靴磨き 金工面また靴先きに日が落ちる 靴裏の水の冷たさ世の幸さ 負いね気のすつきり立ったハイヒール 酔つばらひ帰ったが靴の紐解けぬ 靴紐を解けばがつかり旅づかれ せがまれて結んだ孫の靴 今日からの俺に職わり 靴 タップダンス伴奏よりも靴の音 これはまわずらり吾が子の靴の数 ハイヒール著さと希望のせて行く 磨 快夢起 草一郎 我樂太 魔花麗 加里比 友 Щ 河 子 有 村 波

## 竹原支部句會(廣島縣)

四月九日 可笑居

花· 合服

花の下少しはいける女連れ 釈放の娑婆はいつしか 花盛り 質草も出來す花見は断る 花びらへそつと口づけする若さ 花によせて考いたる母の便り來る 図取れて万朶の櫻だけにほ 合服へ去年のしみをふと見付け 合服に消更へた娘の 合服へ寄り添ふセルの足 白し 合服のネクタイ嬲る春の風 氣の早い合服かるく 街をゆり 合服でゆから若芽の萠える野え 乳の 芳 同。同 可 芳 笑

大げさに友をさがして 花

9

塘 泉

聞こえない振でおやドは寝てしまひ

旅立らは開屋ミまがふりユック負ひ 旅先の手紙流れの音も書き 夕焼を車窓にうけて ひとり旅 旅先で拾つた恋を拾て、來た

早百合

花代子 ひさみ

この町も復

世祭

旅

· 0)

夜

道問えばあかん~~と耳を差し

持多念少々襲をこらえとき

しやべるだけもやべつて響アイミ去に

鬼

新家庭らしい座をとる 花の下 今日は今日明日は明日だだ花の下 同 闻

**微山支部句會** (微車好)

於 三月十二日 配電局階上洋間

相談・自由・離 小西無鬼 報

借金の相談隅へ連れてゆき 相談に勝手な時だけ飛んで來る 相談を冗談にする憎らしさ 相談をして不始末が 露見する 相談へ妻も一役買つて出 税務署は相談だけぢや効きまへん わりこめば又一杯をやる話 相談は二階へもつて上ったり 今日も未だ相談しときますかいな よい話になったかいなど上月間ひ とほる 同 同 同 士 字: 四

相談の相手が然しい末亡人 御自由にと言われてからが治味くなり 母親の出鼻をくじく 自由 遊びすぎ自由がた」る学順 相談へ一方的に押しつける 相談へマア気の早い事わいな 相談に乗つても臭れず飲むはかり 相談が出來てそれから飲み直し よい話まとまるとこへ間がつき 逃げ腰の口喧嘩にも自由主 主 木 蒜太郎 こよし + 14 鬼

雜川

あざみ婦人句命 藤 定

美

看護婦・膝・旅

明け番となつて看護婦よく笑ひ 看護婦と云はれたくない日曜日 看護婦の肩で歩ばるようになり 看護婦も毛糸編んで る秋の風 看護婦の夢ふるさとの迷 退院に近く看護婦在をく 看護婦は医者の二号の様に見え 花代子 樹

夕曇りはくには惜しい 花の 入学のカバンとれてる無心の子 窓口は冷たかりけり民生 退院の窓はいつらか春の 二
た
世
帶
窓
に
も
何
か
干
し
て
あ
り こつそりと思からぬけて遊びに来 夜櫻は遠い背の夢に 切り花で娘心の友を かげぜんに入学つげて母はなき 入学のその日から名をといるから 入学で初めて部屋が奥へら 訪 0

嫁しづいて子を抱く膝になってるた

膝

0

ひさみ

何日の日か女を泣かす膝になり 叱られたハンカチ膝でもてあるが 仕合な新譜 を膝の上であけ 花束をかゝへた膝がはずむなり もう膝を離れあんなが出來てる子 まだ若い膝が荷物をすけてやり 膝すこし崩して女三味を彈き 看護婦の不幸は母の脈をとり 青春を白衣としての 素 顔 なり

獨草婦人句會 (吳庫縣)

相客を氣にして坐る一人旅

遠く來た思ひ寂しい 駅に 立ち

若

樹 . 甫 菜

へら合

へら合の傷なつかしい頃になり へら台へ娘笑わね日がついき へらむをひろげ嬉しい傷をつけ 白 點 Ji] 會 (姬路市 朝

三月六日夜 於 燕子居

人学・花・窓・あんま

花代子 万亀子

ナミエ

定

美

美奈子

花

見えるよなこともあんさは云よりのぞ 大事件見て來た様にあんまいひ あんまはん旦那に内緒と調ぎされ 銭湯の盛りにあんまみつけて來 街頭のあんまに春の 雪が降 車窓から鯨の如く佐渡が見 又 人入院らしい 懲あかり ふと開けた窓へ郵便投げていき 戦犯の最后のわかれ窓ごしに

洋装で來るお茶病は膝が見え

美奈子

定

7)3 :Nî

膝しばも窓の吐息を吸ふてゐる 陸ぬけたズボンアパート暮なり 膝にしむ凝男は强いも おらが存機の下の

族行いですとあつさり断られ 新婚の旅でカバンをすられて來 旅をする子にお守りをころうつけ

> 樹 岡

甫 TH.

人旅カパン一つで用が足り

へれの久し次よ件國さ世行師さ時マ▼ 大る句米で第かび川れ八ににん四ー村 阪こ集雄くにつ出柳た日参伴に十と と一氏れ快た席大▼の加け河で 阪)は大阪府教育委員長に就 ・として訪日、五月十四日朝七 ・として訪日、五月十四日朝七 ・として訪日、五月十四日朝七 ・として訪日、五月十四日朝七 ・として訪日、五月十四日朝七 ・として訪日、五月十四日朝七 ・として訪日、五月十四日朝七 ・として訪日、五月十四日朝七 ・としてが、皆ら出掛けて ・として近の病縁も で成念 ・でが、皆ら出掛けて ・でが、皆ら出掛けて ・でが、皆ら出掛けて ・でが、皆ら出掛けて ・でが、皆ら出掛けて ・でが、皆ら出掛けて ・でが、皆ら出掛けて ・でが、皆ら出掛けて ・でが、皆ら出掛けて ・でが、皆らにが、皆らにが、 ・でが、 ・でが、

診つ絵(ささ月さこ田いるれまた日で大多任 療た画兵れれ十れび流ると、テ布縣の較忙さ 所▼家庫る、五た、水と聞手ル哇)る労をれ 所に電話が開迎した、南三九 を通り越して近頃睡眠不足と を通り越して近頃睡眠不足と を通りなどへても で從兄を送って東上され、 大氏であったので後見でで東上され、 大氏であったのでで、 大氏であったのでで、 大氏であったので、 大い、 本にでかったのでで、 大い、 本にであったので、 大いでで、 大いで、 大いで、 大いで、 大いでで、 大いで、 大いで、 大いで、 大いでで、 大いで、 、いいで、 大いで、 、 大いで、 、 大いで、 大いで、 大いで、 大いで、 大いで、 、 大いで、 、 大いで、 、 大いで、 大いで、

誌総

主務長 麻武中

生部島

路香生

伊

藤

社

会と句郎林庵

出かけ、記事がら泊り

朝掛けれて

曜 早開 健 地 川间大会 柳雜 組とでは、土曜

午の八 後工四 六十▼ rはりホノルハールによる: ロ川魔花麗氏 か近か ら月ノ 三廿ル

+--,

大会委員長 中島生た大会委員長 中島生た。 はちまして大盛会に終了、を腹膜を挙げます。 は中上げます。 はいれい おお に際しては柳人はじめ各方像に際しては柳人はじめ各方のである。 厚多お方大 く大陸面会

藤 定 六 會

英面別 (大阪市) 泉山平 关 讯 '神 縣 港 正正正程正

親梓間▼リ参のか熱と午 親の一碗をおすゝめしたい。 と▼西尾菜氏は五月下旬、箱根、 と▼西尾菜氏は五月下旬、箱根、 のお供をして温泉巡りから善光寺 のお供をして温泉巡りから善光寺 のお供をして温泉巡りから善光寺 のお供をして温泉巡りから善光寺 のお供をして温泉巡りから善光寺 のお供をして温泉巡りから善光寺 のお供をして温泉ででいる。 と▼西尾菜氏は五月下旬、箱根、 と氏の孝養ぶりから書光寺の東と養母の本種の、箱根、 持らっつ上人

上 同 同 岡 久米 氏紹

黑直丸

田原山

高級化粧料容器には断然! 自銀株式會社

粗 影 半休氏紹介 正

## 山友中村安村川田弘川村野嶋原谷澤助生建 JII 柳 不 朽 洞 澤高橋麻西蛭柴前山安山高田龜 田鷲本生島子谷田路川本尾村井

步子光堂介

作鈍雨乃丸二郎健古英迷雄介修 藤大村水三内藤岩古前戶石高寺福 大米上小浪 坂松谷翰藤 井崎川山田井 西本 ш Л ЦI 整形夢鮎晚 一友山花北古面 八志梨

4 郵亜綠葭○省二伍開留雨亮之晟

田藤高山白中末淺藤長高笠長池

二光郎吉吉雄郎一作溶峰生微居

晴米路」祭

辰雅六祐 期守大

蒋 水 裡 美 零 郎 郎 石 麗 海 方 人 浪 々 樓

郎步

戶武獎中 杨洞會

普香丹 々

小村石高永山西築木丹濱川山岡西福宮北井 田場上 田田浦田<sup>田</sup>東尾山村波<sup>田</sup>村根村垣田田林上 水食一沙流柳抱上路 **夢孤斗米好梟路錦妄不松湧** 兆水水 逸九城 栞起 浪士雄郎 人三風夢 二代 三

八德小井鈴夷鈴青逸菊好櫻關尼布北竹黑正中石須 木<sup>水</sup>見澤崎川根崎施川內川本 西 會 崎 正雅恒寒石一九柳灯松申不山方领春潮紫水。民豆 柳美明浪鹿笑坡子竿閩仙水彦正川巢花香客む郎秋

小佐國增杉小稻吉弘岡小水水尼橋新中木岡村河大 澤野弘田谷<sup>坂</sup>葉田 津 崎橋谷谷 史卜牛耕湖雨場井柳祥隆琴竹之奈博鐵幽嶺角甲 葉占休民山來花堂慶月如水莊助子也洲王泉堂東子

大月藤山白早小大多糸土野闷南山下手在吉久大小 口山島間田連鶴西 西原田分牛川林塚田本井本門 野将天北奇聽文一一醉文吞紫皷秋清 介明風路朗松月球波月蝶水雲扇花潮舟樓水月由鬼

中飯東吉吉山石富藤福小渡篠種橋鈴山近絀蒲科亀 內降田村村野原岡田島田邊山 詰木根藤屋 田 埜 山 b 翠白晩風一星伯淡た正蝎孫 蘇瓜 東多白亞無鈍種晴 芳香鳥郎路登峯舟る則牛拙彦平雀を星仁人太美峯

上黑直丸伊松松岸靜太大森友上山間阿和竹林長西 於田原山藤江井 岡田西下淵田林<sup>島</sup> 五久田野 野 辻 粗笑而伽定梅可南忠良柳蹙贵春正丹万洞芦甦井竹 影泉山平美里笑柳八子堂論山柳思子滴人穗光蛙青

## 編輯室にて

とマッチした全合を持つたことは 全國川柳大会が斯くも盛火に大衆 大会記念号のかたちとなつたが、 ★前号は大好評だつた。★本号は

愛したものが多い。途号、句会や されたい。★「各地柳堰」もハンする労苦を察して命しばらく辛抱 がある。吹田市の野本春水君の隣 れは何んとかしなければならない 支部の会報が増加するので、何づ ランと云う盛況ぶりた。次号へ割 柳樽」の作家がアンノ〜進出して 人が「川柳雜誌」を手にしている 安いと云う評判である。斯んな話 誌代を三〇四に値上げしたがまた と思つている。★本誌は前号から 刊、休刊で騒いでいる際に、続刊 文化方面の雑誌が枕をならべて廃 ページもしたいと思つているが、 記事面が減少した。そのうちに増 めにスペースを割いた。それだけ **來たので本号ではその人たちのた** 

1,0 毎度のことで恐縮だがどうかよろ は七月廿五日、発表誌は八月号。 ○四(前金)で幾口でも結構、と切 を申込んで頂きたい。一トロー〇 交称と本誌支援の意味で暑山廣告

である。毎年のことながら、

## 静

集合、奈良縣字陀郡三本松村滝谷、 西辻竹青居で開催▼南区医師会文 川柳会は五月十五日午前九時上六 神社で開催された▼大阪遺信病院 野支部句会は五月廿一日夕、王子 ト・フェア場内の野外劇場で開催 鉄沿線あやめ池遊園地日本ステー (別稿大会記事参照)▼川雜阿倍 大会」は五月八日午前十時から近 「日本ステート・フェア全國川柳 本社主催·朝日新聞社

容易ならぬものがあつた。句会部

るから総務の武部香林氏の苦心は

の土井文蝶氏が、ソレデネを連発

た。詳しくは大会記事を読まれた

しながらの大活躍もうれ しかつ

良縣まで運はればならないのであ 近縣とは云いながら、お台所を奈 とあと始末も大変だつた。何分、 |近來の傑作だつた。その代り準備

部をつくるつもりです」とのことがか或は私のグループで真面目に 力か或は私のグループで真面目に 一条員は先生の御紹介頂いた 真で「会員は日下九名であるが、好 攻部会員は日下九名であるが、好 いんの 幹事で息野祭で開催された、 の創立句会が五月五日、川村好郎 行された▼川難東京支部(東京都) 行された▼川難東京支部(東京都) 「米三翁古稀祝賀川柳句帳」を刊 災復興の感謝川柳会を開催される 災復興の感謝川柳会を開催される

鯛

(十句) 武部

香

林

選

課題吟募集

募

集

## 七月三日(日) 本 社 旬 會 午後一 は

の人達を迎え羽衣

から川雑浜寺支部

月廿日午後五時牛

待つている間の流物が欲しいので ないかと思いました。実は電車を 野本さんとあるから、あんたでは 水さんてあんたですか、吹田市の ので、不思議に思つていると、呑

の諸氏にお願いした。今後もメン 曾根民郎、尼綠之助、浜田久米雄 後氏のまとめ役で、田中辰二、石 い。★句評「展望車」は福田山南

バーを多少変更したり、方法を変

へ
た
り
し
て
句
許
を
続
け
て
い
た
だ
く

兼題 大阪市南区鰻谷仲之町六八 「牛ズボン 大宝文 各三旬 化会館

のもりだ。★堀口塊人氏から随筆

「天皇に就て」、 浜田久米雄氏か

本屋に、 にも健康で真夏を突破したいもの こへ暑さが迫つて来た。兎にも角 値上げは出來ない。★やがて、そ たと云うのである。こんなファン はれて、谷水岩眼をパテーへさせ た。なかくいム雑誌ですると云 もあるので、よくノンでなくては つたら、この本を渡してくれまし 番安い雑誌ないかと

> た▼川柳人クラブ を偲ぶ集りをされ

会が五月廿九日に

五月廿一日二十倉 童氏(愛の縣)は 催される▼渡辺曉 山大悲閣で句会開 六月十八日、天地 川雑篠山支部では も路郎主幹出席▼ ら開催、以上何に 月五日午後三時か ▼南柳居小集は五 駅合宿で開催、

政策と数整の期間

を云つているかを紹介しているの

とする。本誌としては非詩派が何 す本誌の態度を表明しておくこと で、本誌が非詩論派だと誤解して 急先鋒石原青竜氏の原稿が載るの 感がある。★本誌に川柳非詩派の た。羆い競物で食後の菓物と云う ら「鐘の鳴る村」の寄稿があつ

4

原みし

いる人があることを知つたので、

火いに論すべしである。★「近作 ないからである。詩派も非詩派も り返へるところに、進歩も向上も も聞かずに、唯我独尊式におさま にすぎないので、反対派の云ひ分

> 海電鉄川柳会は五化会館で開催▼南 十七日夜、大宝文 化部川柳会は五月

洋数・魯道・日本 茶道 舞道 (小原流・未生流) (流・花月庵流・宗衛

等曲・要案

B列5岁

毎月一

回

一日発行

服飾デザイン 手襲・古典・新舞踊 長唄・小唄・艦曲

電幣一一七一番大 駁 日 本 橋

Made in occupied Japan

詳細お問合せは

七階文化クラブ事務所へ

大阪市住吉區万代商五丁月二五零地 大阪市住吉區万代西五丁目二五香地 4 幸 =

郎

発行所

坂神社で開催される▼川柳風見草 後援の下に金沢市制六十周年記念 る▼かにの目川柳社主催、金沢市 大阪市交通局五階和室で開催され 川柳大会が七月十日午後一時から 、柳大会が六月十九日正午から小

## 友人 Ш 文章(評論・研究・感想其他) |作柳樽(雜詠廿句)麻生路郎選 柳塔(雜 每号募集 (每月出日報刊) (十句) 占川魔花麗選 (八月五日締句) (七月五日報切) 詠)麻生路郎選

▼『近作柳樹』は 一般作家の雑吟 を募る。 所氏名雅号を明記する事。 投句は各種必ず別紙に認め、 負に限る。 『川柳塔』への投句は不朽洞倉 佳

規

定

雜誌 册 (送料二円) 金三〇四 五四 罗卷

昭和廿四年六月一日 発 行 昭和廿四年五月廿五日印刷 一ケ年概算 金三九六 金一九八円 四

川柳雜誌社 大阪と石〇五〇

のことの

三笑氏(金沢)は最近病狀軽快と 根縣)は侑正と改多された▼西本